

自然のリズムの共同体験が人間形成に大きな意義をもちます。

オットー・フリードリヒ・ボルノー

Communal Experience of the Rythm of Nature is Extremely Significant for Character Formation

Otto Friedrich Bollnow

森田 去る5月9日～12日大阪で開催された国際グリーン・フォーラムでの記念講演のために来日されましたがこれは先生にとって6度目の訪問だと思います。最近の日本の変化についてどう思われますか。

ボルノー 1959年に私がはじめて来日したとき以来の27年間に日本がどれほど変わったか、6度目の訪問とはいえ、そのつどの短い滞在の印象からは判断することができません。

ただ、私の愛する古い日本の文化、庭園や寺院などはいつまでも変わりませんし、私はそのことを嬉しく思っています。もう一つの、激しく上昇している産業国家としての日本は、おそらく大きく変わってきているのでしょうか。

森田 大阪の国際グリーン・フォーラムでの先生の講演「都市と緑と人間と」は、参集した二千人を超える聴衆に深い感銘を与えましたが、そのなかで、先生は、これからの都市問題としての最も重要なポイントとして次のことを指摘されました。要約しますと、人間はその家に住まう者として、

安全を求めるけれども、人間の家は要塞ではありません、絶対的な安全はありえない。「人間があまりにも臆病に安全性のみ求めることを断念して、生き生きとした自然の緑のなかで人間を迎え入れてくれる、より大きな生命のなかに自分が守られてい

ることを知ることが大切である」し、また逆に「緑に象徴される人間的な住まいの可能性が都市計画のなかに生かされなかったならば、人間がどんなに心に準備しても空しいだろう」という点でした。

ボルノー 大阪のフォーラムで明らかになったように、今日の巨大都市における自動車専用道路は、多くの場合、防音壁によってすっかり視界を奪われていて、まるでトンネルの中を通っているかのようになっています。また大都市のなかでの生活も、窓から見えるのはコンクリートの壁ばかりという味気ないものになりつつあります。こうした状況をどう乗り越えるかが問題になったわけです。このフォーラムへの招待は、私にとって懐かしい日本に再び戻ってくることを可能にしてくれただけではなく、「人間と空間」の問題について私が以前に考えたことを補正する機会を与えてくれました。

つまり、以前に私は、人間はそこから出発し、またそこに帰ってくる「住まい」という中心を必要とするこ

とを強調したわけですが、この「家」はけっして要塞のようなものと考えられてはならないということです。たしかに人間は自分の家の中に安全性を見出そうとするのですが、家はいつでもさまざまな危険に晒されています。火事や天変地異、盗賊の侵入、



西独テュービンゲン大学名誉教授。哲学及び教育学。1903年生まれ。M. ボルンのもとに理論物理学で学位を得る。のちにE. シュブランガー、G. ミッシュ、H. ノールにつき哲学を学ぶ。初期のハイデガーに強く影響を受け、またディルタイの哲学を継承しつつ独自の哲学的人間学的な考察を發展させた。

インタビューア

森田 孝

当学会誌編集委員長。大阪大学人間科学部教授。専門は教育哲学、人間形成論。最近は言語と人間形成、人間形成の思想史、人間の生涯と発達などの研究に取り組む。



あるいは今日では他人の好奇の眼差しなどの危険に直面しています。人はこうした「家」を絶対に安全なものと考えたことを断念しなくてはならないのです。むしろ「緑」と呼ばれるものの意義がここで重要なものとなります。それはただ緑色というのではなく、ヘルダーリンが美しい詩のなかに表現したように、人間を外側から迎え入れ、元気づけ、若返らせてくれるものです。ドイツ語のグリューン(緑)という語は、もともと「生長する」という意味のインド・ゲルマン語から来ています。生命一般のシンボルとしての樹木の緑のなかで人間は守られ、生かされているのだという「安らぎ」を得るのです。

森田 数10年前までは、たとえばこの京都はもっと静かな町でしたし、緑に包まれていましたが、今日では日本の古都も車の洪水で着着きを失い、開発が周辺地域の緑を蚕食しています。

ボルノー 外面的な観察から言えば、美しい古い寺院や古い家並みの前に、沢山の車が並んでいて、思索から引き戻されることがしばしばです。これをどう解決するかは専門家の問題ですが、私のチュービンゲンでの経験からすれば、もっと歩行者の側に立って考えなくてはならないように思われます。もう少し広い範囲をおおう駐車スペースを確保することによって、歩行者専用地域を拡げることができれば、路上に椅子を置いて坐れるようにすることもできるでしょう。ドイツでは町はずれの森の中にも歩行者のための専用道路がとってあって、散歩をしたり、家族や友人と静かに食事をしたりできる憩いの場所が確保されています。そこでは散策するだけでなく、静かに瞑想することもできるのです。

森田 その点について私はいつも思うのですが、ヨーロッパ、とくにドイツでは、もともと人間が森の中に入りこんで、そこに住んだと言えますが、日本は国土のほぼ70%が険しい山岳・森林地帯であり、残りのわずか30%の平地にすべての人口が集まって住んでいます。つまり日本では、森とは人の住めない所であり、自然そのものは背後にあって人間は入

り込めないものなのです。だから日本人は盆栽のように小さくした自然を愛し、自然を映し出した庭園の形で自然を鑑賞するのです。

ボルノー 人の住まない山中に寺院を開くという例はヨーロッパにもないわけではありません。庭園の意味についても、たしかに日本においては、ドイツにおけるよりもさらに芸術的に作られています、根本的には同じだと思われま。庭園は多くの人のためにあるものであり、都市内の公園は、こうした庭園の代用物なのです。それともう一つ大切なことは、私自身のささやかな庭園での体験からも言えることですが、庭仕事の中で一番大切なのは、樹木の生長は人間の思いのままに加速することはできないということ、秋が来て木の葉が落ち、冬を経て、やがて春がめぐって来て再び新芽が緑に萌え出てくるまで、人は辛抱強く待つことを学ばなくてはならないということです。ここにも緑に象徴される自然の生き生きとしたリズムがもつ教育的な意義があります。人間がこの自然のリズムを共体験するなかで、自分自身の生のリズムをも経験すること、人間がとどまるべきときを感じ取り、じっと耐えて待つこと、春がもたらす新たに目覚める生命を共体験すること、これらのことが今日、都市のなかに住む人間にとってきわめて大切だと思われま。

インタビュー後記

私の恩師であるが、今回大阪のフォーラムへの招きによって思いがけなく来日を実現した。先生の一九六三年の名著「人間と空間」のなかで空間と交通の問題についていろいろと論ぜられている。御自身も若い頃はかなり運動もされた由であり、私も初めにチュービンゲン大学で先生のものと学んだ時、一度乗せてもらったことがあるが、最近はずっと奥様が運転役であるように伺った。先生と話している、交通の問題については、もっと日本のなさを生かした解決法を生み出さなくてはならないと痛感する。(昭和61年5月19日実施)